



「難しさを感じることもありますが、楽しい仕事です」



専用の機械で行われた水稲の「もみまき」作業



すてきな歌、
市内ホテルでサロ
石丸さんと後町

堺千代さん (36)

患者の心癒やす ■ホスビス看護師

明るい笑顔に、患者の表情がなごむ。函館おしま病院（函館市市場町）のホスビス病棟の主任を務める。昨年夏、道南で初めて「ホスビスケア認定看護師」の資格を取った。有資格者は道内でもわずか四人だ。

福岡市生まれ。「病気の妹が頻繁に病院に通っていたせい」か、「子どものころから「将来は看護師に」と思ってきた。高校卒業後、岡山の順正高等看護専門学校に進み、岡山大医学部付属病院消化器外科に就職した。

末期患者に数多く接するうち、死が近い人に対する看護のあり方を考え始めた。そんな時に読んだ、死に直面する患者と

医療チームを描いたベストセラ―「病院で死ぬということ」（山崎章郎著）が転機に。「ホスビスで働きたい」と、二十五歳で故郷・福岡にあり、ホスビスの病床数では全国でも最大規模の栄光病院へ移った。

ホスビス病棟に九年間勤めたが、新人を指導する立場になり、



「勉強し直したい」と二〇〇三年に退職。東京の日本看護協会看護研修学校でホスビスケアを半年間学び、一年半前に栄光病院でともに働いた福徳雅章医師が院長を務める函館おしま病院に移ってきた。高齢の患者の昔話にゆっくと耳を傾けることもある。「その人の歴史が見えてくる。人間対人間としてかわわっている気がします」

今年から道医療大（石狩管内当別町）が認定看護師の養成に乗りだし、同病院も実習先になる予定だ。「まだ人に教える立場ではないけれど、知っていることを伝えたい」と控えめに語る。（杉山育子）

ここに生きて